令和6年度第七十九回仙台第二高等学校入学式

祝辞

令和六（二〇二四）年元日、能登半島地震があり、自然の力は暴力的であり、破滅的な能登の姿を目の当たりにしました。震災によって亡くなられた、あるいは被害を受けられた人々に哀悼の意を捧げたいと思います。

一方、コロナ感染禍、ウクライナ、あるいはパレスチナにおける戦争と、人間の力も暴力的な姿を曝しております。時間、空間が短縮され、網の目のように形成された、この「グローバルな地球社会」で起きるさまざまな事象は、「ローカルな地域社会」でも、その影響から逃れ出ることができません。

しかしながら、世界中を席巻したコロナウイルス禍は終息を迎えてきました。このような状況のもと、宮城県仙台第二高等学校における、令和六年度、第七九回、入学式が、ここ講堂において、無事挙行されることとなりました。

栄えある今日を迎えた新入生は、男子一八三名　女子一三七名、合計三二〇名とお聞きしております。

宮城県仙台第二高等学校同窓会を代表いたしまして、勉学を積み重ね、見事合格した新入生の皆さんにお祝いを申し上げます。と共に、今日というこの入学式を迎えるにあたって、これまで一生懸命にサポートに徹してきた保護者の方々が、このように多数列席いただきありがとうございます。と同時に、わたくしからも、皆様方に衷心よりお祝い申し上げます。

入学式は、新入生をお迎えするために「いはふ」儀式であり、最初の「おもてなし」をする場となっています。。ここ講堂にお集まりの新入生は、はじめて仙台二高という共同体に入るべく、訪れた「客人（まれびと）」といえるかもしれません。

さて、昨年、高橋賢校長からお聞きしたのですが、コロナ禍で中断していたアメリカ研修旅行が昨年再開したとのことでした。その際、旅費の高騰もあり、巡る都市は、ボストンにほぼ限定されてしまったそうです。

ボストンといえば、東京美術学校（現在の東京藝術大学美術学部）校長であった岡倉天心が長らく中国、日本部部長として勤めていたボストン美術館があります。天心は、英語を幼少時から学び、欧米文化に触れ、東洋、日本文化のなんたるかを語る必要性を感じていたのでしょう。『茶の本 The Book of Tea』を英語で出版しています。

三十年以上前に、わたくしは、東洋部作品の展示を含めて所蔵品を鑑賞しようと、二日ほどボストン美術館に滞在したことがあります。わたくしの大学生時代、約六十年前の上野の本館木造校舎にあった、擬宝珠（ぎぼし）の付いた手摺階段とか、大机などの調度品がまったく同一であり、明治時代にタイムスリップした感じになりました。

加えて、ヨーロッパの印象派、後期印象派の傑作も多く、ゴーギャンのタヒチで描かれた最大の作品である『われわれはどこからきたのか。われわれはなにものか。われわれはどこへいくのか。』も陳列されていました。絵そのものも素晴らしい作品ですが、「Where Do We Come From？ What Are We？ Where Are We Going？」という題名に反応して自問自答してしまいました。

昔日の日々、日本に飛来する白鳥も、「どこからきて、どこへ行くのか」、そして白鳥は「なにものなのか」と、日本に住む人々は不可思議に思っていたのでしょう。谷川健一『白鳥伝説』を読んで知ったのですが、仙台藩にも、なかでも刈田郡や柴田郡に「白鳥伝説」がありました。たとえば、仙台藩藩祖の伊達政宗は、第二代の忠宗が初めて仙台にお国入りしたとき、鉄砲で白鳥を撃つことは「白石ばかりは無用に候」と手紙で注意を与えているのです。このように、秋になると飛来し、春になると飛び立つ白鳥は、稀にくる客人として遇されており、大切に扱われてきたのです。刈田嶺神社は、白鳥神を祀っており、この事実は、清和天皇の貞観十一年（八六九）までさかのぼれるといわれています。

白鳥は、日本武尊（やまとたけるのみこと）が語られている記紀の時代から日本人の霊魂のかたどりとみなされてきたのでしょう。

わたくしの幼き頃を少し思い出してみます。小学一年生の春、青葉の山、青葉城址へ、花見遠足で登りました。小学校時代、毎夏、松淵、賢淵の廣瀬の流れで水泳をしました。とにかく、牛越橋から澱橋までの河原は、遊び場であり、中学生や高校生になっても、澱橋の袂（たもと）の土手によく寝そべっていました。青空を移動する雲の流れを追うと、い

つの間にか雲に身をまかせている自分を発見し、身体までもふわふわ動いていく感覚にとらわれます。将来の生きる方向性が定まらず、悩んでいたからかもしれません。

そのような時期、絵を描くことが唯一の楽しみでした。線を引く、色を塗る行為が楽しい。画面のなかの、その線と色とを見ていると、心が少し動くのです。筆を動かすと、次の一手のアイディアが生まれ、線が加えられ、色も加えられる。目による対象物と画面との往還には、手の運動も加わり、知らず知らずのうちに、画面はできあがってきます。そこには、自意識によるコントロールではない、無意識の心身の働きがあったようなのです。

このような絵画制作という二高美術部での体験が積み重なり、二年次には、美術教師二宮不二麿先生のすゝめもあり、東京藝術大学絵画科油画専攻受験へと舵を切ったのです。と同時に、応援団副団長に推されてしまいました。

男女共学となった仙台二高であっても、新入生には、等しく応援練習が課せられていると、聞いております。是非、応援歌を覚え、大きな声で歌ってください。応援歌練習を積み重ね、試合で応援すると、きっと満ち足りた気分が、そして仲間としての一体感が醸しだされ、そこに喜びと笑いにみちた空間に包まれるでしょう。

仙台二高は、おたがいがそれぞれの立場を尊重し、多様性を秘めたそれぞれの人格を認め合う場なのです。人と人の会話、コミュニケーションは、微笑み合いながら、共に感じ合い、会話が積み重ねられると仲間としての信頼感が生まれ、この小さな共同体はより活性化するのでしょう。対一高定期戦の応援の伝統もその現れだろうと思います。

仙台二高でのこれから、「ともに　ともに　いそしまむ　いざ　いざ　怠らず」、勉学研鑽と身体運動がハイブリットに重なり合う、「文武一道」に努め、仲間と一緒に、真摯に励んでください。そのように集中すると、いつもは気づけない、心の奥深くにある本来の「自分自身、自己」の姿を発見してしまうことがあります。そのような心の声を聞くことができないでいると、「自分自身」の、氷山の一角に過ぎない、表面に見出される「自意識、自我」に頼ってしまいます。そうなると、短絡的に結果を求める、たとえば偏差値至上主義や、極端な拝金主義も生まれてしまうのです。

純粋無垢な、なにものにも穢されていない白鳥のような新入生のみなさん、三年後には飛び立ってしまいます。三年間、本来の真の自己探求に励み、心の奥深くにある「自分自身、自己」に限りない信頼を寄せ、その秘めたる小さな種子を丁寧に育んでください。一人ひとりの文武一道を試行錯誤しながら開拓してください。

近い将来、「ローカルな地域社会」と「グローバルな地球社会」の一員として、なにものかを作り出し、厳しさを乗り越えて、その厳しさのおかげで身近な人々にありがとうといえる人間としての成長を祈念いたします。

わたくしは、ビートルズを聴きながら、高校、大学時代を過ごした世代に属しますが、最後に、ジョン・レノンとオノ・ヨーコが共同で作詞作曲した「イマジン Imagine」の一節を読んで、祝辞といたします。

You may say I'm a dreamer
But I'm not the only one
I hope someday you'll join us
And the world will live as one

令和五年四月十日

宮城県仙台第二高等学校同窓会
会長　佐藤一郎